

## 平成27年度浩志会本会員活動方針

代表幹事 七澤 淳

学生時代、学業には決して真面目とは言えない自分であったが、今でも心に残る講義の一場面がある。1990年代前半、翌年からの宮仕えが決まり、期待と不安の日々の中での日本政治思想史の講座であった。教授曰く、江戸時代の日本人は自国のことを「小国」であり「コメの国」だと認識していた、というのである。当時の日本の人口は世界有数の約三千万人、江戸は一時期世界一の大都市であったとの史実はさておき、歴史的に隣の大国中国が常に比較の対象であったこと、徳川体制がコメ本位制の社会であったことは理解できる。むしろ、その頃、湾岸戦争で超大国米国への支援策が国論を左右し、ウルグアイ・ラウンド交渉の只中で「コメを守れ」との声が路上にメディアに溢れていたことと交錯し、日本は何も変わっていないのかという思いに衝撃を受けたのである。

時代が移ろっても人間の意識は意外と変わらぬものだと思う。グローバル化と新興国の台頭という大変革を迎えても、米国や隣国しか見ないで国際問題を考えていないだろうか。人口減少局面とはいえ、高い基礎教育と規律を誇る1億人以上の人口（世界第十位）を擁し、企業がグローバルな生産体制を築き上げ、グローバル経済とは不可分な繁栄を享受していても、「小国」意識から抜け出していないことはないか。

浩志会活動とは（規定にあるとおりだが）、要するに、日本をいかに良くするかについて議論し切磋琢磨することだと理解している。浩志会メンバーは日本を代表する大企業や政府省庁の職員から構成されている。この新たな時代に、良く言えば「エスタブリッシュメント」、悪く言えば「一時代前のエリート」が集まってこのような活動を行うことの意味について問い直す価値はあろう。情報化時代にもかかわらず、浩志会にはプレスもない、ITベンチャーもない、サービス産業も少ない、いわんや外国人もない。

様々な答えやご批判があろうが、私なりの答えを述べたい。ヒト・モノ・カネが国境をたやすく越えるグローバル化の時代には国家の意味がなくなるとも言われる。もちろん、ビジネスでは妥当する面も多々あろう。しかしその半面、世界に「剥き出し」になった個人はむしろ国家に自意識の基盤を見出している

のも事実ではないか。海外に出ると日本のことを強く意識するのは誰もが有する経験であろう。だからこそ、日本を良くすることは国民一人一人がグローバルに活躍する上での自信を与えるものと考えている。

我々は、「一時代前のエリート」とはいえ、未だ日本社会に大きな影響を与える組織に属し、それぞれ世界の変化に敏感に接する立場にある。実務経験を積み、組織や社会に良いインパクトを与えることが期待されている。こうした我々でなければできないことは必ずあり、それを浩志会活動で具現していきたいものである。

我々が活動に際して留意すべきことは何だろうか。「一世代前のエリート」であることを自覚し、旧弊に陥らないことは当然であるが、以下の3点を挙げてみたい。

第1に、各人がそれぞれの視野を提供すること。変化の底流や深層を捉え、見えないものをイメージすることは容易ではない。そうしたとき、広く社会に関わる我々個々の見識や経験は貴重なものである。現在（2015年夏）の世相に鑑みれば、日本の平和と繁栄を支えるものは何かについて、メディアでは報じられない実務経験や見識を持ち寄って議論するのも興味深い。

第2に、社会の幅広い利益を考えること。我々は基本的に男性・事務系・正社員の集まりである。時代の趨勢を見据え、女性や次世代はもちろん、非正規雇用、消費者、都市住民、外国人、環境等々際限がないが、社会を構成する様々な主体の利益を全体としてどう増進するか考えることが重要だと思う。これは、いわゆる上から目線である必要はない。我々も都市住民であり消費者でもある。その意味での我々の利益をいかに増進させるかという議論もあって良い。

第3に、自らの役割を再定義すること。議論の末に、自分の属する組織や社会、さらに家庭においてこうしてみたい、となればこの活動の本旨であろう。上記をまとめると、各々の視点に刺激を受け、社会全体の利益に思いを致し、自分は何をできるか、を導き出したいものである。ここまで書きながら、以上のことは生き馬の目を抜く競争の最中にあるグローバル企業には至極当然のことであるのご批判をいただくのではないかと恥じ入っているが。

こうした活動を通じて、「日本は〇〇の国である」という新たな自己認識を育むことができれば楽しい。冒頭に記した「日本はコメの国」という認識も、日本は丹精込めて何かを作る国と言い換えれば、江戸時代の「コメ」も現代の例えば「自動車」も変わらないかもしれない。もちろん、いつまでもこの国でコ

メだけを作っているだけではグローバルな時代に生きてはいけないのは当然であるが。「日本は小国」というのも、「謙虚な国」と考えてみればそれはそれで良い。

変わらない（生き残る）ためには変わり続けなければならない、とは誰かの言であった。この「変わり続ける」起動力は、エスタブリッシュメントの我々の側にも大いに期待されるものであろう。その上で、心ある実務家として世界や社会にこれだけ深く接する我々に試されるのは、切り拓く力かもしれない。前例は作るものである。

今回代表幹事という大役を仰せつかった。以上勝手なことを述べたさせていただいたが、ご寛恕いただきたい。浩志会において、素晴らしい仲間が様々な企画を通じて青臭く議論し、そして何よりも楽しめる環境を少しでも作ることができればと願っている。

(了)